

中・高・大学生における携帯電話の使用状況と 生活環境への影響に関する調査

渡邊 典子¹⁾、久保田美雪¹⁾、石崎トモイ¹⁾、小柳 恭子²⁾

1) 新潟青陵大学看護学科

2) にいがた思春期研究会

The study of cellular phone, the state of use and the influence on the environment of living
for junior high school, high school, and university students.

Noriko Watanabe Miyuki Kubota Tomoi Ishizaki Kyoko Oyanagi

1) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSINDS

2) ADOLESCENCE IN NIIGATA

Abstract

We carried out questionnaire concerning cellular phone at junior high school, high school, and university to find the state of use and the influence on the environment of living for junior high school, high school, and university students.

The results are as follows.

The rate of possession of cellular phone, 30% of the junior high school students have cellular phone. On the other hand, above 90% of the high school and university students have it. The ratio of use of telephone call function, there is no difference between them. The charge, 3,000~6,000yen is for junior high school students, 6,000~9,000yen is for high school and university students. The influence brought by using cellular phone, 50~60% of junior high school, high school and university students feel their pleasure of living increase. 40~50% of them increase their same sex friends. 30~40% of them increase their opposite sex friends. The site for encounter, 90 of possessors, 3 of no-possessor have entered it. 17 of possessors have been suffered damage.

Key words

Cellular phone, daily life, parent and child relation, friend relation, site for encounter

要 旨

中・高・大学生の携帯電話の使用状況と生活環境への影響を知る目的で、中学生、高校生、大学生へアンケート調査を行った。その結果、携帯電話の所持率は、中学生3割、高校生、大学生は9割以上であった。電話機能の使用割合について、中・高・大学生ともに差がなかった。使用料金について、中学生「3~6,000円」、高・大学生「6~9,000円」で、主たる支払い者は「両親」であった。携帯電話使用による影響について、中・高・大学生ともに「生活の楽しみが増えた」5~6割、「同性の友人が増えた」4~5割、「異性の友人が増えた」3~4割であった。出会い系サイトについて、「接続したことがある」は、所持者90人(中学生4人、高校生34人、大学生52人)、非所持者3人(中・高・大学生各1人)、「自分の被害経験あり」は、所持者17人(中学生2人、高校生10人、大学生5人)であった。

キーワード

携帯電話、日常生活、親子関係、友人関係、出会い系サイト

はじめに

近年、日本において携帯電話の利用者の低年齢化も進む中で、所有率は年々上昇している。現代の若者にとって携帯電話は、友達とのコミュニケーションツールとしての人間関係構築および維持のために不可欠な必需品の1つでもある。また、緊急時や災害時の連絡など、そのメリットは、さまざまところで発揮されている。特に思春期では、交友関係の広がり、出会い系サイト絡みの犯罪、有害情報の氾濫、個人情報の悪用など、生活環境への弊害や危険性などのデメリットが指摘されていることも事実である。

そこで、携帯電話の使用状況、携帯電話所持後の日常生活・親子関係・友人関係の変化と出会い系サイトの意識と利用状況を知る目的で、中学生、高校生、大学生を対象に調査を行った。

・研究方法

1. 研究対象

対象は中学3年生245人、高校生1～2年生461人、大学1～4年282人であった。対象への依頼手順として中学校、高等学校は校長、大学は学長へ調査協力について文書にて依頼し、市内の中学校2校、高等学校2校、大学2校で承諾を得た。調査用紙は、各学校へ郵送した。

2. 研究期間と方法

調査期間は2005年4月～12月。

調査方法は、科目担当教員から授業の時間などを利用して、無記名自記式質問紙の配布と回収を行ってもらった。

調査内容は、携帯電話の使用状況、携帯電

話所持後の日常生活・親子関係・友人関係の変化と出会い系サイトの意識と利用状況に関してである。

データ分析はSPSSバージョン11を使用し、不明や無記入はそのつど欠損値として処理した。

倫理的配慮

質問紙の表紙に調査の趣旨、研究参加は自由意思に基づくこと、集団単位で分析すること、結果については学術目的（学会発表）以外には使用しないこと、疑問や不明な点にはいつでも回答すること、同意した各施設、あるいは個人のプライバシーを厳守し、研究終了後に質問紙は適切に処理することを保証した。

・結果

1. 対象の属性（表1）

回答者は、中学生239人（有効回答率97.6%）、高校生444人（有効回答率96.3%）、大学生271人（有効回答率96.0%）であった。

対象の属性は、中学生男子129人、女子110人、高校生男子175人、女子269人、大学生男子19人、女子252人であった。

携帯電話の所持者（以下所持者と略）は、中学生63人（27.2%）、高校生430人（96.8%）、大学生269人（99.3%）であった。携帯電話の所持年齢の平均についてみると、中学生13.35歳（SD1.07）、高校生14.91歳（SD0.83）、大学生15.71歳（SD1.10）であった。

以下の結果2、3は所持者のみ、結果4は所持者と携帯電話の非所持者（以下、非所持者と略）の結果である。

表1 対象の属性

	性別		携帯電話		所持者の所持年齢				
	男子	女子	所持者	非所持者	平均値	中央値	標準偏差	最小値	最大値
中学生	129(54.0)	110(46.0)	63(27.2)	169(72.8)	13.35歳	13.00歳	1.07	10歳	15歳
高校生	175(39.4)	269(60.6)	430(96.8)	14(3.2)	14.91歳	15.00歳	0.83	12歳	17歳
大学生	19(7.0)	252(93.0)	269(99.3)	2(0.7)	15.71歳	15.00歳	1.11	2歳	19歳

2. 携帯電話の使用状況

(1) 携帯電話の所持台数、携帯の状況、公共の場での使用説明(表2)

所持台数は、1台が中・高・大学生ともに90%以上であった。

日常の携帯状況として中学生では「毎日持ち歩く」25人(43.1%)、「選択的に持ち歩く」33人(56.9%)とほぼ二分された。これに対し高校生、大学生ともに「毎日持ち歩く」は95.0%以上であった。

携帯電話の公共の場での使用説明を受けたのは、中学生では「受けた」11人(18.0%)、「受けない」18人(29.5%)、「覚えていない」32人(52.5%)、高校生では「受けた」60人(14.1%)、「受けない」159人(37.2%)、「覚えていない」208人(48.7%)、大学生では「受けた」23人(8.6%)、「受けない」176人(65.7%)、「覚えていない」69人(25.7%)であった。年齢が上がるにつれて使用説明を「受けた」と回答したものは減少し、「受けない」と回答したものは増加した。

(2) 携帯電話の機能の使用状況(表3)

機能である電話、メール、インターネット、写真、時計、電卓、ゲーム、手帳、辞書の9つについてみると、「電話、メール、インターネット、写真、時計、電卓、手帳、ゲーム」の8つは中・高・大学生ともに約50%以上が使用していた。これらの中で「電話、メール」は中・高・大学生ともに90%以上であった。

また、「辞書」の機能は、中学生28人(45.2%)、高校生151人(35.2%)、大学生77人(28.7%)と中学生が最も高かった。

(3) 携帯電話の機能の使用頻度(表4)

1日の使用頻度について「電話」、「メール送信」、「メール受信」、「インターネットの接続」の4つでみた。中・高・大学生ともに「電話」、「インターネット」については「1~3回」が最も多く、「メール送・受信」は「10回以上」が最も多かった。

(4) 携帯電話の使用料金について(表5-1、2、3)

1ヶ月の使用料金について、中学生「3~6,000円」23人(37.7%)、高校生は「6~9,000円」148人(34.7%)が最も多く、大学生は「6~9,000円」85人(31.7%)、「3~6,000円」84人(31.3%)でほぼ同じであった。(表5-1)

料金の支払い者についてみると「両親」としたのは中学生53人(88.3%)、高校生346人(80.8%)、大学生206人(76.9%)と最も多かった。「自分」としたのは中学生5人(8.3%)、高校生66人(15.4%)、大学生50人(18.7%)であった。

現在の使用料金についての考えは、中・高・大学生ともに「普通だと思う」が最も多く、50%前後みられた。「使いすぎ」と考えているのは中・高・大学生ともに20~30%であった。(表5-2)

表2 携帯電話の所持台数、携帯の状況、公共の場での使用説明 人(%)

	所持台数		日常の携帯状況		使用説明		
	1台	1台以上	毎日持ち歩く	選択的に持ち歩く	受けた	受けない	覚えていない
中学生	53(91.4)	5(8.6)	25(43.1)	33(56.9)	11(18.0)	18(29.5)	32(52.5)
高校生	404(97.3)	11(2.6)	416(97.2)	12(2.8)	60(14.1)	159(37.2)	208(48.7)
大学生	254(98.1)	5(2.0)	265(99.3)	2(0.7)	23(8.6)	176(65.7)	69(25.7)

表3 携帯電話の機能の使用状況(複数回答) 人(%)

	電話	メール	インターネット	写真	時計	電卓	辞書	手帳	ゲーム	その他
中学生	57(91.9)	59(95.2)	47(75.8)	52(83.9)	51(82.3)	49(79.0)	28(45.2)	31(50.0)	40(64.5)	4(6.5)
高校生	423(98.4)	427(99.3)	368(85.6)	392(91.2)	395(91.9)	360(83.7)	151(35.2)	233(54.2)	330(76.7)	22(5.1)
大学生	267(99.6)	265(98.9)	212(79.1)	248(92.5)	243(90.7)	245(91.4)	77(28.7)	132(49.3)	136(50.7)	10(3.7)

いつもより使用料金が高いときはどうするかについては「使用を控える」が中学生38人(62.3%)、高校生264人(61.8%)、大学生206人(76.6%)と最も多かった。「いつもどおり

使用する」としたのは中学生8人(13.1%)、高校生59人(13.8%)、大学生22人(8.2%)みられた。(表5-3)

表4 携帯電話の機能の使用頻度

		人(%)					
		0回	1~3回	3~5回	5~7回	7~10回	10回以上
中学生	電話	22(34.9)	35(55.6)	2(3.2)	3(4.8)	0(0)	1(1.6)
	メール送信	6(9.5)	7(11.1)	8(12.7)	8(12.7)	5(7.9)	29(46.0)
	メール受信	4(6.3)	11(17.5)	8(12.7)	6(9.5)	4(6.3)	30(47.6)
	インターネット接続	12(10.4)	42(67.7)	4(6.5)	1(1.6)	0(0)	3(4.8)
高校生	電話	139(32.7)	269(63.3)	11(2.6)	4(0.9)	1(0.2)	1(0.2)
	メール送信	10(2.4)	77(18.2)	51(12.1)	33(7.8)	40(9.5)	211(50.0)
	メール受信	9(2.1)	82(19.3)	48(11.3)	38(8.9)	34(8.0)	214(50.4)
	インターネット接続	88(20.8)	205(48.3)	58(13.7)	15(3.5)	5(1.2)	53(12.5)
大学生	電話	62(23.0)	197(73.2)	10(3.7)	0(0)	0(0)	0(0)
	メール送信	2(0.7)	54(20.1)	61(22.7)	52(19.3)	28(10.4)	72(26.8)
	メール受信	2(0.7)	57(21.2)	56(20.8)	54(20.1)	29(10.8)	71(26.4)
	インターネット接続	77(28.6)	165(61.3)	16(5.0)	7(2.6)	1(0.4)	3(1.1)

表5-1 携帯電話の使用料金

		人(%)								
		3,000円未満	3,000~6,000円	6,000~9,000円	9,000~12,000円	12,000~15,000円	15,000~20,000円	20,000~30,000円	30,000円以上	分からない
中学生		5(8.2)	23(37.7)	9(14.8)	13(21.3)	8(13.1)	0(0)	0(0)	0(0)	3(4.9)
高校生		21(4.9)	127(29.7)	148(34.7)	91(21.3)	27(6.3)	0(0)	5(1.2)	2(0.5)	6(1.4)
大学生		11(4.1)	84(31.3)	85(31.7)	56(20.9)	20(7.5)	0(0)	8(3.0)	4(1.5)	0(0)

表5-2 使用料金についての考え方

		人(%)				
		使いすぎ	普通に思う	使っていない ほうだと思う	なんとも 思わない	その他
中学生		15(24.6)	30(49.2)	12(19.7)	3(4.9)	1(1.6)
高校生		103(24.1)	247(57.8)	66(15.5)	9(2.1)	2(0.5)
大学生		78(29.0)	140(52.0)	48(17.8)	2(0.7)	1(0.4)

表5-3 使用料金が低い場合の対応(複数回答)

		人(%)						
		使用を控える	いつも通り 使用	相手から 電話をかけて もらう	アルバイト をする	節約をする	家族に 支払って もらう	その他
中学生		38(62.3)	8(13.1)	2(3.3)	0(0)	11(18.0)	3(4.9)	2(3.3)
高校生		264(61.8)	59(13.8)	8(1.9)	8(1.9)	89(20.8)	15(3.5)	14(3.3)
大学生		206(76.6)	22(8.2)	7(2.6)	2(0.7)	44(16.4)	5(1.9)	3(1.1)

3. 携帯電話の影響

(1) 日常生活の変化(表6)

日常生活の変化について、外出の頻度、夜型の生活、コンビニの利用、性への興味、孤独感、ストレス、楽しみの7項目について、「多くなった又は増加した」「変わらない」「少なくなった」でみた。7項目のうち「生活の楽しみ」は中・高・大学生ともに5割以上が「多くなった又は増加した」、他の6項目は中・高・大学生ともに「変わらない」が多かった。

「生活の楽しみ」を除く6項目について「多くなった又は増加した」に着目して中・高・大学生をみた。中学生では「生活の夜型」14人(22.2%)、高校生では「外出の頻度」91人(21.2%)、大学生では「ストレス」67人(25.0%)が「生活の楽しみ」につづくものであった。

(2) 親子関係の変化(表7)

親子関係について、親密度、会話の頻度、外出の伝言、監視の4項目について上記と同様にみた。4項目全部について中・高・大学生ともに「変わらない」が最も多かった。各項目について「多くなった又は増加した」ついてみると、中・高・大学生ともに「外出先の伝言」中学生19人(31.1%)、高校生112人(26.3%)、大学生127人(47.7%)であった。

(3) 友人関係の変化(表8)

友人関係について、同性と異性の各人数、新密度、トラブルの6項目についてみた。6項目全てにおいて中・高・大学生ともに「変わらない」が最も多かった。各項目について「多くなった又は増加した」についてみると、同性の「友人数」は中学生28人(49.5%)、高校生212人(49.5%)、大学生126人(47.4%)、「親密度」は大学生132人(49.6%)、中学生27

表6 日常生活の変化 人(%)

		多くなった	変化なし	少なくなった
中学生	外出	10(16.1)	51(82.3)	1(1.6)
	夜型の生活	14(22.2)	48(76.2)	1(1.6)
	コンビニエンスストアの利用	8(13.1)	52(85.2)	1(1.6)
	性の興味	6(9.8)	52(85.2)	3(4.9)
	孤独感	7(11.7)	51(85.0)	2(3.3)
	楽しみ	39(66.1)	19(32.2)	1(1.7)
	ストレス	9(15.0)	51(85.0)	0(0)
高校生	外出	91(21.2)	333(77.6)	5(1.2)
	夜型の生活	75(17.5)	351(81.8)	3(0.7)
	コンビニエンスストアの利用	58(13.5)	364(84.8)	7(1.6)
	性の興味	30(7.0)	396(92.3)	3(0.7)
	孤独感	37(8.6)	355(82.8)	37(8.6)
	楽しみ	225(52.4)	200(46.6)	4(0.9)
	ストレス	44(10.3)	369(86.2)	15(3.5)
大学生	外出	47(17.5)	220(82.1)	1(0.4)
	夜型の生活	34(12.7)	233(86.9)	1(0.4)
	コンビニエンスストアの利用	11(4.1)	254(94.8)	3(1.1)
	性の興味	7(2.6)	260(97.0)	1(0.4)
	孤独感	51(19.0)	173(64.6)	44(16.4)
	楽しみ	146(54.5)	121(45.1)	1(0.4)
	ストレス	67(25.0)	195(72.8)	6(2.2)

表7 親子関係の変化

人(%)

		多くなった 又は深くなった	変化なし	少なくなった 又は浅くなった
中学生	親密度	10(16.4)	48(78.7)	3(4.9)
	会話の頻度	5(8.2)	54(88.5)	2(3.3)
	外出の伝言	19(31.1)	40(65.6)	2(3.3)
	親の監視	14(23.0)	42(68.9)	5(8.2)
高校生	親密度	32(7.5)	385(90.2)	10(2.3)
	会話の頻度	14(3.3)	405(94.8)	8(1.9)
	外出の伝言	112(26.3)	304(71.4)	10(2.3)
	親の監視	47(11.0)	367(85.9)	13(3.0)
大学生	親密度	49(18.4)	216(80.9)	2(0.7)
	会話の頻度	22(8.2)	242(90.6)	3(1.1)
	外出の伝言	127(47.7)	132(49.6)	7(2.6)
	親の監視	27(10.1)	220(82.4)	20(7.5)

表8 友人関係の変化

人(%)

		多くなった 又は深くなった	変化なし	少なくなった 又は浅くなった
中学生	同性の友人数	28(45.9)	32(52.5)	1(1.6)
	同性の友人との親密度	27(44.3)	33(54.1)	1(1.6)
	同性の友人とのトラブル	8(8.2)	51(83.6)	5(8.2)
	異性の友人数	25(41.0)	35(57.4)	1(1.6)
	異性の友人との親密度	18(29.5)	42(68.9)	1(1.6)
	異性の友人とのトラブル	5(8.2)	53(86.9)	3(4.9)
高校生	同性の友人数	212(49.5)	214(50.0)	2(0.5)
	同性の友人との親密度	179(41.8)	243(56.8)	6(1.4)
	同性の友人とのトラブル	17(4.0)	394(92.3)	16(3.7)
	異性の友人数	129(30.1)	289(67.5)	10(2.3)
	異性の友人との親密度	77(18.0)	343(80.1)	8(1.9)
	異性の友人とのトラブル	21(4.9)	395(92.3)	12(2.8)
大学生	同性の友人数	126(47.4)	140(52.6)	0(0)
	同性の友人との親密度	132(49.6)	134(50.4)	0(0)
	同性の友人とのトラブル	9(3.4)	250(93.6)	8(3.0)
	異性の友人数	86(32.2)	180(67.4)	1(0.4)
	異性の友人との親密度	81(30.3)	185(69.3)	1(0.4)
	異性の友人とのトラブル	20(7.5)	243(91.0)	4(1.5)

表9 出会い系サイトの意識と利用状況

人(%)

		言葉を知っている	事件を知っている	興味がある	接続経験がある	出会い系サイトで知り合った人に電話番号やメールアドレスを教えたことがある	自分が、被害経験がある	友人が、被害経験がある
中学生	所持者	61(98.4)	48(78.7)	4(6.5)	4(6.5)	4(6.5)	2(3.2)	1(1.7)
	非所持者	151(94.4)	132(83.5)	1(0.6)	1(0.6)	0(0)	0(0)	0(0)
高校生	所持者	425(99.1)	391(91.6)	17(4.0)	34(8.0)	21(4.9)	10(2.3)	10(2.4)
	非所持者	13(92.9)	11(78.6)	1(7.1)	1(7.1)	1(7.1)	0(0)	1(7.1)
大学生	所持者	268(99.6)	263(98.1)	16(5.9)	52(19.4)	40(14.9)	5(1.9)	15(6.1)
	非所持者	2(100.0)	2(100.0)	1(50.0)	1(50.0)	0(0)	0(0)	0(0)

人(44.3%)、高校生179人(41.8%)であった。異性について同様にみると「友人数」中学生25人(41.0%)、大学生86人(32.2%)、高校生129人(30.1%)、「親密度」大学生81人(30.3%)、中学生18人(29.5%)、高校生77人(18.0%)であった。

4. 出会い系サイトの意識と利用状況(表9)

出会い系サイトについて、表9に示した9項目について中・高・大学生の所持別にみた。「出会い系サイトの事件を知っている」は、中学生の所持者48人(78.7%)、非所持者132人(83.5%)、高校生の所持者391人(91.6%)、非所持者11人(78.6%)、大学生の所持者263人(98.1%)、非所持者2人(100%)であった。「出会い系サイトへの接続経験がある」は、中学生の所持者4人(6.5%)、非所持者1人(0.6%)、高校生の所持者34人(8.0%)、非所持者1人(7.1%)、大学生の所持者52人(19.4%)、非所持者1人(50.0%)であった。また、「出会い系サイトで知り合った人に電話番号やメールアドレスを教えたことがある」は、中学生の所持者4人(6.5%)、非所持者0人(0%)、高校生の所持者21人(4.9%)、非所持者1人(7.1%)、大学生の所持者40人(14.9%)、非所持者0人(0%)であった。

出会い系サイトの被害経験では、「自分が被害にあったことがある」は、中・高・大学生の所持者で中学生2人(3.2%)、高校生10人(2.3%)、大学生5人(1.9%)であった。その被害内容を自由記載でみると、「架空請求された」「間違っ

て接続し、金額を請求された」など10人全て金銭的な被害であった。次に、「友人が被害にあったことがある」は、中学生の所持者1人(1.7%)、高校生の所持者10人(2.4%)、非所持者1人(7.1%)、大学生の所持者15人(6.1%)であった。その被害内容を自由記載でみると「架空請求された」「金を払えと言われた」「だまされて、多額の金額を請求された」など金銭的被害9人、「SEXを強要された」「性病をうつされた」など性的被害5人であった。

考察

1. 携帯電話の使用状況

中学生の所持率27.2%、高校生96.8%について、4年前の2001年6月、新潟県青少年問題研究会が行った調査結果と比べると、中学生は約7倍、高校生は1.3倍となっている(2001年、中学生4.9%、高校生74.0%)。県内の中学生において所持率は、目をみはるほどの増加となっている。また、上別府ら²⁾が2002年に首都圏の5公立中学に行った調査での所持率は49.3%であり、3年前でも首都圏では既に半数の中学生が所持をしていた。このことは、調査時期も異なること、市内の中学校2校ということから首都圏と地方による差と考えるのはあまりに短絡的ではあるが、いづれにしても携帯電話は、中学生にとって急速に普及の段階にあるといえる。反面、高校生、大学生の100%に近い所持率は、普及の段階は過ぎ去り「当たり前なもの、当然のもの」となっていることをあらわしている。また、中・

高・大学生の所持年齢の平均値から携帯電話の低年齢化も進んでいると推測できる。

9割以上の高校生・大学生が携帯電話を「毎日持ち歩く」という状況は、洞澤³⁾が指摘する「メディアの身体化」であり、「これらは使用時または携帯時における物理的な距離ばかりでなく、携帯電話に対する心的距離が自己に近いこと、つまり親和性の高い」ものになっていると考えられる。さらに、携帯電話が手放せない必需品となっている。

購入時、公共の場での使用の説明を受けたことがあるとしたのは、中・高・大学生の中で中学生が最も高いが、2割程度である。現在、電車やイベント会場などで必ず携帯電話に関する注意事項がアナウンスされる。これは、携帯電話所持者が拡大しているとともにマナーが守られない現状を示している。佐々木らは、小・中・高校生の調査から「発達段階が進むほどその傾向（情報社会のマイナス面が出る - 傍点筆者）は強く、学年進行の早い段階からの計画的な情報モラルの育成が必要⁴⁾」としており、携帯電話の低年齢化の進行という状況も考え合わせると、携帯電話販売業者、家庭、教育現場、地域のすべてで情報モラルやマナーの教育が、今後、一層はからなければならないと考える。

諸機能については、今回の調査の8つの機能のうち「辞書」「手帳」を除く6機能については中・高・大学生ともほとんどの人が使用していたことより、様々な機能を使いこなしていることがわかる。また、電話とメールの1日の使用頻度で最も高いのは、電話「1～3回」（中学生55.6%、高校生63.3%、大学生73.2%）であるが、メール送・受信は「10回以上」（中学生46.0%・47.6%、高校生50.0%・50.4%、大学生26.8%・26.4%）となっている。このことより中・高・大学生は、電話よりもメール機能を多く使用しており、メールがコミュニケーションツールとして定着していることを表している。特に年齢が下がるほどにその傾向は顕著であった。これは、通話料金が高いことからその使用を控えるという行動と関係していると考えられる。

使用料金については、中学生は3～6000円、高・大学生は6～9000円が最も多かった。料

金について、三宅⁵⁾（短大生対象）は月8000円以上が半数、入江ら⁶⁾（短大、大学生対象）は月平均8,154円としていることなどから考えると、われわれの調査結果もこれらと同様の結果であったと考える。また、支払い者については、中・高・大学生ともに「両親」が7～9割みられたが、三宅と入江らの調査では自分自身で払っているものが4～5割と報告している。中・高校生との比較はできないが、大学生において親への経済的依存の傾向が強いということを表している。料金に対して使い過ぎと考える中・高・大学生は2～3割みられ、使用料金が高い時の対応策としては使用を控えるものが中・高・大学生の6～8割にみられた。親への経済的依存傾向がこのような対応と関連があるかどうかについて、今回の調査では言及できない。

2. 携帯電話の影響

日常生活への影響について、「多くなった又は増加した」が最も高いのは中・高・大学生ともに「生活の楽しみ」であった。今回の調査から楽しみの内容は不明である。しかし、同調査の友人関係の変化で中・高・大学生の約4～5割が、同性の「友人数」と「親密度」が「多くなった又は増加した」と答え、さらに、異性の「友人数」についても中・高・大学生の3～4割、「親密度」は中学生・大学生が約3割、高校生は約2割「多くなった又は増加した」としていた。このような交友関係の広がりや深さが、本調査の日常生活の楽しみの内容の1つとなっていることは容易に推察できる。また、「生活の楽しみ」を除き「多くなった又は増加した」ものは、中学生では「生活の夜型」14人(22.2%)、高校生では「外出の頻度」91人(21.2%)、大学生では「ストレス」67人(25.0%)であった。携帯電話を使用することによる生活の夜型など生活時間の不規則については、入江ら⁹⁾や上別府ら¹⁰⁾、森光ら¹¹⁾も同様の指摘をしている。電話よりメール機能を多く使用している実態から、時間をとわないやりとりが行われていることも容易に推測できる。また、メールによる友人といつもつながっている関係維持の一方で、過剰なメールの送受信につながったり、互いに

監視しあうことになったり、メールが返ってこないと不安や心配というストレスをひきおこしていることも否めない。

今回の調査で既に述べたように、友人の数や親密度が携帯電話を持つことによって増加したことが明らかになった。これらに関する¹²⁾ことについて、辻は、携帯電話が友人関係の形成に役立った若者は、友人の数が多く、知り合い程度の友達のような親しさの度合いの高くない友人関係を増加させる可能性の示唆を指摘している。また、池本は「携帯電話は、人間関係の親密さに関しては、親しさを増幅させる効果が期待できる半面、携帯電話に管理されている、従属していると感じはじめるとその関係性を損なう危険性を持っており、諸刃の剣」であるとそのプラスとマイナスを指摘している。われわれの調査結果は、形式面における友人の数については辻の調査と一致しているが、内容面に関する親しさの度合い、池本が指摘する築かれた関係性の継続や絆の強さについては不明である。

携帯電話の人間関係および日常生活への影響について中村は「影響レベルとしては意識面、行動面、関係性、規範の各レベルがある。メカニズムでは、簡便化（手近にあるため簡単に電話ができる）、直接性（直接本人と話せる）、常態化（いつでも電話できる）、そしてその他の特徴（時計機能、メモリー機能、発信番号表示機能、着信音の多様性、加入・解約の容易さ）」を指摘している。中村の指摘するこれらの携帯電話の要素が互いに関連し、時には拮抗しながら、とくに若者の日常生活や人間関係に影響を及ぼしている。

3. 出会い系サイト

出会い系サイトについて、中・高・大学生の所持者と非所持者ともに出会い系サイトの事件を知っているものが約8割でありながら、サイトに接続し、見たこともない相手に電話番号やアドレスを教え、さらに、被害経験がある人がみられた。その被害内容は、自分自身では金銭的被害、友人では金銭と性的被害であった。警視庁¹⁵⁾によれば2006年度の出会い系サイトの被害者の利用手段は携帯電話が94.7%、被害者は高校生38.7%、中学生34.0%

と報告している。このこととあわせてみて中・高・大学生の知らない他者への無防備さ、安易さ、警戒心のなさ、そしてバーチャルな世界への関心・興味的一端を示すものであり、出会い系サイトの事件や犯罪の急増につながっている。佐々木ら¹⁶⁾、森光らも指摘しているように情報の選択的・批判的収集能力と活用能力、判断力や豊かな想像力の育成が重要である¹⁷⁾と考える。くわえて、携帯電話事業者やWeb提供者にも良心的な対策が望まれるところである。

まとめ

中・高・大学生の携帯電話の使用状況と生活環境への影響を知る目的で、中学生、高校生、大学生へアンケート調査を行った。その結果、

1. 携帯電話の使用状況について、携帯電話の所持率は、中学生3割、高校生、大学生は9割以上であった。電話機能の使用割合は、中・高・大学生ともに差がなく、使用料金は、中学生「3~6,000円」、高・大学生「6~9,000円」、主たる支払い者は「両親」であった。
2. 携帯電話使用による影響は、中・高・大学生ともに「生活の楽しみが増えた」5~6割、「同性の友人の数が増えた」4~5割、「異性の友人の数が増えた」3~4割であった。
3. 出会い系サイトについて、「接続したことがある」は、所持者90人（中学生4人、高校生34人、大学生52人）、非所持者3人（中・高・大学生各1人）、「自分の被害経験あり」は、所持者17人（中学生2人、高校生10人、大学生5人）、「友人が被害経験あり」は所持者26人（中学生1人、高校生10人、大学生15人）、非所持者高校生1人であった。

おわりに

携帯電話は、われわれの社会の中で、コミュニケーションツールとしての機能を進化させながら増加を続けるであろう。そのことは誰の目にも否定できない事実である。さらに、新しいツールの登場も予測できる。このような情報化社会の中で安全に楽しく暮らすためには、うまく、賢く情報を選択し活用できるメディアリテラシー教育とメディアの使用ルールやマナー教育を携帯電話の低年齢化にともない早い段階からの必要性を強く感じる。

さらに、思春期の世代にとって人間関係構築に欠かせないツールである携帯電話のプラス面とマイナス面については、現在、議論のあるところである。コミュニケーション能力という視点とあわせ、今後研究を深める必要がある。

本研究の限界は、調査対象が学年および性別において偏りがあったことから、これらをふまえ、調査を重ねていきたい。

謝 辞

本調査に御協力いただいた中学生・高校生・大学生の皆様に深く感謝申し上げます。

本調査は、平成15、16年度新潟青陵大学共同研究費助成を受けて実施した。

また、本論文の要旨の一部は第24回日本思春期学会にて報告した。

引用・参考文献

- 1) 新潟県青少年問題協議会．青少年の生活実態と意識の状況 第9回新潟県青少年健全育成実態調査結果．新潟県．2001：134．
- 2) 上別府圭子他．ケータイメールが中学生の友人関係に及ぼす影響 - 首都圏5公立中学校における調査．こころの健康．日本精神衛生学会誌．2004；19(1)：73-81．
- 3) 洞澤伸．若者たちの人間関係が携帯電話で始まるとき．岐阜大学地域科学研究報告．2003；12：63-74．
- 4) 佐々木和也他．発達段階における情報メディアの利用実態．社団法人映像情報メディア学会技術報告．2002；26(70)：9-12．
- 5) 三宅喜美代．ケータイメールを利用する若者の対人関係 - 本学学生のアンケート調査の分析 - ．大垣女子短期大学研究紀要．2002；43：49-59．
- 6) 入江明美他．若者の携帯電話利用の状況と意識 - 札幌大谷短期大学と札幌国際大学における現状 - ．札幌大谷短期大学紀要．2002；33：121-133．
- 7) 同上5)．
- 8) 同上6)．
- 9) 同上6)．
- 10) 同上2)．
- 11) 森光義昭他．情報化社会の現状と課題．久留米信愛女学院短期大学研究紀要．2004；27：45-56．
- 12) 辻泉．若者の友人関係形成と携帯電話の社会的機能．松山大学論集．2005；16(6)：143-164．
- 13) 池本禎子他．若者の携帯電話・メールにみるコミュニケーションに関する一考察．順正短期大学研究紀要．2006；35：173-180．
- 14) 中村功．携帯電話の普及過程と社会的意味．現代のエスプリ．2001；405：54．
- 15) 警視庁のホームページ
<http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/toukei/keitai/keitai.htm>
 2007年12月17日
- 16) 同上4)．
- 17) 同上11)．